

第九章 反撃

1

鏡像宇宙が誕生して四日目。

まだ四日しか経過していないことに萌黄は驚いていた。とくに、自宅を後にしてから三日間は、遭遇する何もかもが非日常の連続で、未だに夢心地の感が否めない。(でも、これこそが現実——リアルなんや)

午前八時半。

加太^{かだ}は静かな港町だった。

上陸にこの港を選んだ理由は、遠目にも雑然とした雰囲気^{きふき}を漂わせていたからだ。目立つ外観をした探査船が入港するには、漁船が舳先を並べる雑多な風景は絶好の場所に思えた。

しかし港に人影はほとんどなかった。防波堤には釣り人の姿もない。

探査船は好奇の目に晒^{さら}されることもなく、わずか数時間^{かんじかん}の航海を終えた。

陸^{おか}に上がった萌黄とむんは半覚半醒の伊里江を連れ、柳瀬は緊張の糸が完全に切れた揣摩をおぶって、そそくさと港を離れた。探査船は自動操縦によって、海の底に隠された。

萌黄たちはひとまず目と鼻の先にあつた観光旅館になだれ込んだ。伊里江たちを休ませる必要があつたし、今後の方針も決めていなかったので、とにかく時間が必要だったのだ。

高い宿泊料は、柳瀬の「私にまかせて」にまかせた。

伊里江は正午を過ぎた頃に目を覚ました。

「……すみません。貴重な時間を消費してしまつて」

「ええんよ。夕べは一睡もしてないんでしょ？」

萌黄がいたわりの言葉をかけたが、

「……お気遣いは無用です。早速作戦を立てましょう」

旅館は鉄筋四階建てのかなり年季の入った建物で、部屋は畳敷きの和風造りになっている。作戦会議は畳の上にデンと置かれた黒檀の座敷机を囲んでスタートした。

柳瀬と揣摩はふすまを隔てた隣りの部屋で休養している。伊里江は自分のリュックを裏返してパソコン仕様に切り換えた。スイッチを入れると、波打った布地が記憶された形状のとおりフラットに戻り、十七インチディスプレイ

レイの姿を整えた。

「……最新データをチェックします——おや？」

「どうかした？」

問いかけた萌黄に、伊里江は凍りついたような顔を向けた。

「……兄からメールが届いています。萌黄さん宛に」

「わたしに？」

伊里江はそのメールをプレビューすると、萌黄に示した。

《本メールが目に触れたとすれば、無事逃げおおせたのだろうな。そのがんばりに敬意を表しよう。と同時に私は萌黄さんとの約束を守らねばならなくなったわけだ。いいだろう、教えてあげよう。私の潜伏している場所は、滋賀の大津^{おおつ}だ。来るなら覚悟して来たまえ》

「大津——琵琶湖^{びわこ}のほとりやん！」

萌黄が小さく叫んだ。するとむんが、

「待ってよ。わたしには文字が裏向きで読まれへん」

「あつ——エリーさん、このパソコンはどうしてリアルに読める字を表示できるの？」

「……こちらの世界に来て最初の作業でした。文字ジェネレーターに細工を施し、キーボードの配置を換えただけ

ですよ」

話しながら、画面をキャプチャすると、画像処理ソフトで左右を反転させ、むんの前に差し出した。時間は十秒とかからなかった。

その手際の良さに感嘆のうなり声を上げながらも、

「大津ってゆーても広いよ」

と意見を述べるのを忘れないむんだった。

「……あつ、見てください。画像が添付されています」

アイコンがダブルクリックされると、ディスプレイに葉書ぐらいの縦長の画像が表示された。写真だった。

「こ——これって、お兄さん？」

むんの問いに、伊里江は眉を曇らせながら頷いた。

「……そうです。不肖の我が兄です」

写真のなかの伊里江真佐吉は「古めかしい名前」という揣摩の評に反して、意外にもシブい男だった。年齢は三十代半ばか。百八十センチは優にありそうだ。

天然パーマの長髪を獅子のようになびかせ、若干瘦けた頬、切れ長の目、細身の身体をジージャンに包んだ姿は、昭和の時代に流行った刑事物ドラマの主人公のようだ。

斜に構えた姿勢。顎をやや上向けた顔には、風貌とは不釣り合いなほど柔和な笑顔をたたえている。右手にはサングラスを持っている。ふだんは掛けることが多いの

かもしれない。

総じて、写真の真佐吉は萌黄の予想を大いに裏切っていた。せめて醜惡な容貌をしてくれているなら、戦闘意欲を煽ることができたのに、その目論見は泡となって消えてしまった。

「撮影場所はどこかな。後ろに噴水が写ってるけど」

「知ってる！」萌黄が叫んだ「花噴水。琵琶湖や！」

彼女は父方の親戚が石山寺いしやまでらにおり、琵琶湖には何度も遊びに行った経験がある。

「……そうですか、やはり大津に」

「それにしても」むんがディスプレイを指で突ついた。

「ホンマにこれがマッド・サイエンティストのお兄さん？ まるで観光ポスターやんか。ちょっとイキがつてはるんとちゃう？」

萌黄も同感だった。まるでからかわれているようで、皮肉のひとつも言いたくなる。

「……CGの二セモノと言いたいところですが——」

弟は肩を落とすと、画面から兄の画像を消した。

2

むんは言い過ぎたと思ったのだろう。軽く喉を鳴らすと、座敷机の中央に置かれた盆から湯のみを取り上げ、

伊里江と萌黄にお茶を注いでまわった。

サッシのガラス窓を通して見える空は、今日も抜けるような快晴である。外はさぞ暑いのだろうが、部屋の中は冷房のおかげで快適だ。熱いお茶もうまい。

一息ついたところで、エリーが口を開いた。

「……居場所を知らせてきたのは、萌黄さんとの約束を守るためなどではありませんね」

「うん」萌黄が後を継いだ。「この世界を丸ごと消してしまうには、リアルを一カ所に集める必要がある。そのXポイントが天津やとしたら、わたしを含めてリアル全員に何らかの方法で働きかけ、天津におびき寄せようとしてるんやわ」

「……つまりは、罠」

「そう。しかもお兄さんは格好の餌を持ってる」

「餌って？」むんが訊ねた。

「――転送装置」

アツとむんは叫ぶと、急須を落としそうになった。

萌黄は湯のみを握りしめた手に力を込める。

「ゲームなんて言うてたけど、結局はお兄さんに都合のいいお膳立てになってるんや。エリーさんから最初に話を聞いた時、どうやって各地に散らばったリアルを集めるのか不思議に思ってたけど、『君たちはこの世界の人間ではない。元の世界に帰りたければ、ここまでおい

で』、そう言って自分から来るように、仕向けるつもりなんやろね」

萌黄の見解に、伊里江は頷いて同意を示した。

「……残すところ、あと十日。日本列島の果てにいたとしても、集めるには十分な時間でしよう。そのために大津という日本の真ん中を選んだのかもしれませんが」

「でも、でもよ——」

むんが身を乗り出して、萌黄と伊里江の顔を見比べた。
「お兄さんはどんな手段を使って、他のリアルたちを発見するつもりなん？ リアルは性別も年齢も住所も問わず、条件に合致した人をランダムに選んだんでしょ？」

伊里江がそうですと答える。

「そうやったら呼びかけようがないやんか。相手がどこ
の誰かもわからへんのに」

もつともだ。萌黄もその点がわからない。

「北海道が消えた時、犠牲になったリアルの子供はどう
やって？」

「……ひとりの場合は規模も小さいですから、出現場所
がひどく限定されるのですよ」

「リアル探知機みたいなモノは？」

「……ありません」

話はそこで行き止まりになった。

伊里江は米軍兵士に受けた麻酔弾の影響で体調が芳し

くないらしく、青い顔を天井に向けると、目を閉じて、床柱にもたれかかった。その顔は血の気が薄く、まるで病み上がりの人間のように見えた。

萌黄とむんは表で買ってきたスナック菓子をテーブルに広げた。外出する時、人目につかないように細心の注意を心がけたつもりだが、ホテルの外も内も人の姿が皆目ないのにふたりはただただ驚いた。

ホテルのそばにはコンビニはなく、お菓子を購入したのは、近所の釣り客相手の雑貨屋だった。

指でつまんだポテトチップを見つめながら、むんが萌黄に訊ねた。

「リアルの人って、何人いるんやっただけ？」

萌黄はチラッと伊里江を見てから、

「十二人。『11人いる！』でもなく『十三人の刺客』でもなく」

「何それ？」

「わたしの生まれる前の、マンガと映画のタイトル」

むんはハアッと息を吐くと、くたつと顔を伏せたが、またすぐ顔を上げて、

「選ばれしリアルメンバーは、誰と誰でしょう？」

「やめてよ、クイズみたい」

萌黄は眉根を寄せながら苦笑いした。それでも少しばかり緊張がほぐれる思いを感じていた。

事態はきわめて深刻だし、タイムリミットはゆっくり、着実に迫ってきている。以前の萌黄のように、ぼーっとしていたら十日などアツという間に過ぎてしまうだろう。ここまでの逃避行で四日が過ぎた。上辺は冷静さを装っていても、焦りは少しずつ頭の中を支配し始めている。さらには、いつどこから襲ってくるかわからない敵もいるのだから、四六時中緊張のゆるむ暇がない。

そんな萌黄にとって、むんはペースメーカーの役を担ってくれている。彼女のおかげでここまで自分のリズムを狂わせずに行動してくることができたと言っているだろう。感謝してもし足りない。

でも、彼女は——むんはヴァーチャルだ。

怪我でもするようなことがあれば、この世界からあぶくのように消えてしまう、そんなひ弱な存在なのだ。

身体を張ってでも、自分が守ってあげないと。

もし逆の立場でもむんはきつとそうするだろう。

「——どないしたん？」

気がつくと、むんが萌黄の顔をしげしげと見つめていた。

「あ、いやいや」

「いやいやないでしょーが」

「えっと、リアルはね」お茶を一口すすり、「エリーさんを別にして、わたし、亡くなったハモリさん、それか

ら揣摩さんによれば、ミュージシャンの影松清香さん」
「三人……ということは、残りまだ九人も、この広い日本のだどこかに隠れてるんやね。まいったなあ」

「もうひとりが判明したぞ」

突然、閉め切っていた隣室のふすまが開き、揣摩が顔を出した。

「いまちようどテレビに映ってる。見てごらんよ」

3

揣摩の言葉が終わらないうちに、萌黄とむんは隣室に駆け込んでいた。

隣室は六畳の広さで、座椅子に腰掛けた揣摩と、気遣わしげに彼の横に侍っている柳瀬は、することもなく部屋の隅に置かれたテレビを見ていたらしい。

そのテレビに新たなリアルが映っている？

また、ハモリ氏のような芸能人？

テレビの前に滑り込んだ萌黄とむんは、まばたきも忘れて画面に食い入った。

今では珍しくなくなった五十インチの大型液晶デジタルハイビジョンテレビの画面に映っているのは、どこかの町の大通りだった。

テレビカメラはその通りを手前から捉えていて、奥か

ら何十人も人間が行進してくる様子が幅広の画面いっぱいに映し出されていた。画面隅に「東京都渋谷区 いま」とテロップが出ている。

「これは何ていう番組？」とむん。

「ニュースだよ」

言われて気づいたが、たしかにニュースキャスターの声が画面にかぶさっている。

《昨日始まったばかりの行進は、今日の午前中には五百人に膨れ上がり、勢いはとどまるところを知りません。彼らは口々に「侵略を許すな」「我が国を守れ」などと連呼していますが、具体的な要求があるようにも見受けられません。ただハッキリしているのは、この行進はひとりの老人が先導しているらしいということだけです》

「この人のことかな」

むんが行進の先頭を風を切って歩くひとりの人間を指さした。

老人は明らかに“浮いて”いた。なぜなら彼の服装がどうやら軍服らしいからだ。平たい帽子をかぶり、長靴を履き、全身を包んでいるのは、かなり古い時代の軍服と思われる。

印象的な口ひげをたくわえた顔は、高齢であることを伺わせるが、それでも背筋はしゃんとしており、毅然とした歩き姿は神々しくさえあった。

一息ついたニュースキャスターが再びしゃべり始めた。
《今朝ほど老人への単独インタビューに成功したレポーターによりますと、彼は周囲の若者たちから“大将”と呼ばれているようで、どうやら日露戦争の英雄、乃木希典の生まれ変わりと言われているようです。》

“大将”が語るには、別段彼が行進を煽動したのではなく、人々が教えを乞いたいと勝手についてきたのだということです。》

群衆が老人を崇めるようにひたすらついていく。

「……このおじいさんがリアルなの？」と萌黄。

「まあ、もう少し聞いてなつて」と揣摩。

カメラが“大将”の横顔を映した。逆八の字の眉が、頑固、厳格といった雰囲気醸し出している。

《問題は“大将”がすでに十人以上の通行人を殺傷しているという事実です。》

“大将”は行く先々で駐車違反のドライバーや信号無視の歩行者など不道德と見られる人間に対して、持っていたサーベルで斬りつけたとされています。

犠牲者の中には暴力団幹部もあり、昨夜“大将”を狙って、組員らによる報復攻撃がありました。ところがおびただしい銃弾を浴びたはずの“大将”はまったくの無傷で、逆に組員らが返り討ちに遭う結果になりました。この様子は生中継の中で起こった事態でしたので、多く

の視聴者の方々がご覧になったかと思います。

“大将”は自らの行動について「彼らに正しき道を示したい」と言葉少なに語っただけでした。ただ「右と左が逆転した」など意味不明な言葉も多いため、“大将”に任意同行を求めたい警察当局は、精神鑑定の必要もあるとの見解を示しています」

画面が切り替わり、夜の町を映し出した。「昨夜」とテロップが出る。公園の外灯の下に居並ぶ若者たちを前にして“大将”は訓示でもしているのだろう。

突然、顔を上げた“大将”に激しい銃弾が雨あられと撃ち込まれた。“大将”の身体はよじれるように後ろの壁に叩きつけられ、そのまま地面に崩れ落ちた。

ところが驚いたことにわずか数秒後、むっくりと起き上がった“大将”は、腰の佩刀はいとうを抜き放つと、老人とは思えない素早い動作で狙撃手に駆け寄り――。

映像はそこで途切れた。この先は茶の間にふさわしくないとテレビ局が判断したのだ。映像の最後で、拳銃を構えたまま驚きに目を剥いた組員の顔が印象的だった。

「……なるほど、リアルのようですね」

いつの間にか部屋に入ってきた伊里江が言った。

「このおじいちゃんちゃんが四人目というわけね。でもこんなに派手に報道されたら、迷彩服も、あの米軍かて放つてはおかへんやろうに」

むんがつぶやいた。

「ねえ」

萌黄はおずおずと振り向くと、視線を畳に落とした。

「ん？」

「このおじいちゃん、呼ぼうよ」

「呼ぶ!？」

「そう、おじいちゃんだけじゃなくて、リアル全員に集合をかけるねん。エリーさんのお兄さんが集めるよりも先に」

4

「……どうやってリアルを一カ所に集めるつもりですか？ それにだいいち危険すぎます。集まったところを兄か敵に見えられれば一網打尽ですよ」

伊里江が珍しく気色ばんだ声を発して萌黄に詰め寄った。

「いえ、その――」

言われるとおりだ。萌黄は返す言葉もない。

その時、脇からむんが助け舟を出してくれた。

「萌黄、ひょっとして、いいアイデアがひらめいたとか？」

「うーん、いいかどうかはわからへんねんけど」

「いいやん、聞かせてよ」

むんは微笑みながら顔を寄せた。彼女に押しのけられた伊里江は、正座のまま目を閉じ、考え深げに腕組みした（もともと何を考えているかわかりにくい人だが）。ふたりの間から、疲れた顔の揣摩と柳瀬がこちらを注視している。

——そういえばわたしは昔から人見知りが激しくて、引っ込み思案の子供だった。他人の注目を浴びるなんて耐えられなかったし、そんな中で自分の意見を披露したことなんて皆無に近い。あっても冷や汗がとめどなく流れ出て、何をしゃべっているのかわからなくなるのが関の山だった。

——でもここ数日、頭の中はすこぶる爽快だ。持病の目眩めまいさえ忘れているくらい。今なら大勢の前で話せと言われればできるような気がする。

——この世界では銃弾を跳ね返すような超人になってしまったみたいだけど、持病や弱い性格まで跳ね返したのかなあ……。

「——んとね」 萌黄はコホンとわざとらしく咳をし、「あの“大将”と呼ばれてるおじいちゃんを見てたらね、かわいそうになってきたんよ」

「かわいそう？」

「うん、きつとすごく孤独やと思うわ」

「……そうかもね」

「まだ会ったことのないリアルルの八人も、おじいちゃん
のニュースを見て、みんな思い悩んでるかもしれない。
それやったら全員集合したらええねん。バラバラでいる
よりきつと戦力になると思うし、互いに助け合えるんや
ないかな」

うーんとうなるむん。萌黄はあわてて、

「そら、敵に見つかったら元も子もないのはわかってる。
でも一番いい解決方法は、爆弾予備軍のリアルルの存在を、
この世から消してしまうことでしょ？ そやったらみんな
集まって、お兄さんの持つてる転送装置で送り返して
しもたらええ」

伊里江が目を開いた。

「……あなたがその結論に至ったこと自体、兄の策略の
内——かもしれせんよ」

「うん」萌黄はこくりと頷いた。「そうかもしれへん。
お兄さんのシナリオに乗せられることになるのかもしれ
へん。それでもやっぱり、これしかないと思う」

テレビは次のニュースを伝えていた。総理から出され
た戒厳令は以前続いており、各地では小規模の混乱が起
きているが、おおむね国民は穏やかに過ごしていると
キャスターは語っていた。

『軽傷でも場合によつては砂状化現象を起こしかねない

ので、危険な行動はできるだけ避けてください』

そう書かれたテロップが、画面の下をエンドレスで流れている。

キャスターの男性はさらにしゃべり続ける。画面は東京副都心の空撮に切り替わった。

「街に行く人の数は、ふだんの数十分の一です。人々はみな家の中に閉じこもっています。

一見、街は平穏に見えますが、すでにいくつもの問題が発生しています。

最大の問題は、流通機構が全面的にストップしていることです。

旅客機や鉄道、バスは、今朝から軒並み運行を休止しています。これはパイロットや運転手らが出社してこないためですが、同じ理由で食糧などの生活必需品を運ぶことができなくなっています。その結果、地方都市の一部では略奪などの行為が発生し、そのため何人もの人が砂状化し、命を落としています。

厚生労働省は今朝の記者会見で、ワクチンは十日以内に完成し、配布するメドが立ったと発表しました。みなさん、どうか無茶な行動は慎しみ、ワクチンの完成を待ちましょう。私からもお願い致します」

キャスターは切実な口調で頭を下げ、番組を締めくくった。——彼にも親兄弟や家族はあるだろう。それな

のにこうしてテレビカメラの前に座り、報道に命を張っている。自分の行為が世の中にわずかでも貢献することを信じて。

「笑わせるじゃないか。十日後には完成だって？　じゃあ十一日経ったら、みんなお手でつないでワクチンをもらいに行こうじゃないか。なあ」

揣摩はカカカと笑い、タバコを取り出して火をつけた。伊里江はそんな揣摩を横目で睨むと、潮時とばかりに腰を上げた。

「……萌黄さん、あちらの部屋に戻りましょう」

「——うん」

「……そしてあなたの言うとおりに、リアルたちを集めましょう。愚かな兄の野望をくじくため」

「いよいよ、反撃開始やね」

むんがにやりと笑った。

ふすまを閉めて元の座敷に戻った萌黄は、ふたりを前に、早速自分の腹案を披露した。

「わたし、広告を出そうと思うねん。インターネットの広告を使って。リアルは今すぐ集まれー、って」

5

「……ネット広告ですか」

さすがの伊里江も意外そうな面持ちでうなり声を上げた。

むんはむんで、萌黄の大胆な提案に大いに興味をそそられたらしく、

「広告を出すといってもいろんな方法があると思うけど、具体的にどうやるの？」

萌黄はきよろきよろと部屋の中を見回した。最近のホテルではインターネットに接続しているパソコンが常備されているが、残念ながらこの部屋には見当たらない。

「SS広告って聞いたことある？」

「SS広告？」

「スクリーンセーバーで広告を見せるという——」

「ハイハイ、話だけは知ってる。ディスプレイの焼き付き防止やらパソコンを離れてる時に他の人に触られたりせえへんように、画面が暗くなったりアニメーションが動いたりするヤツでしょ」

「それはあくまでスクリーンセーバー。SS広告っていうのは、一定時間が経ってスクリーンセーバーが起動したとき、画面に広告が現れるというモンやねん。あらかじめ設定しといたら、ユーザーの好みに合わせた広告が表示されるし、スポンサーからは映ってた分だけキャッシュバックされるという、ちよつとお得なお話で。……なんか、わたしが営業してるみたい」

「……実物を見せましょう」

そう言うと、伊里江は部屋の隅に放り出してあったリュックに手を伸ばし、いつものように裏返してパソコン仕様に仕立て直した。

リュックパソコンはシューンというかすかな起動音と共に立ち上がり、味も素っ気もないデスクトップが表示された。伊里江は画面脇のポケットからマウス代わりのコントローラを取り出し、すばやくスクリーンセーバーを動作させた。

「はーん、これがSS広告かぁ」

画面中央にひとりの男性がギターをかき鳴らしながら登場した。萌黄もよく知っているその男性は、米国大手ソフトウェア会社であるM社のミハシ社長だ。彼はギター一本で社歌を歌いながら、リリースされたばかりの楽器搭載型ウィンドウズを自らアピールしていた。

「こんなふうにCMなんかを流したら、お金が戻ってくる仕組みなんやね」と感心するむん。

「じっさいはその月のネット使用料から差し引く形になるんやけど」

ミハシ社長の演奏が終わったところで伊里江がコントローラを動かすと、画面は元の味気ないデスクトップに戻った。

むんは何度も頷きながら髪をかきあげると、

「今やパソコンは一人一台を超えて、自動車やら楽器やら、最近では建物の各フロアにも置いてあるし、街角にも設置してあるところが増えたもんね。きっと宣伝効果は大きいんやろなあ」

「だからこそなんよ」萌黄は勢いづいて説明した。「S 広告にメッセージを出せば、国民の半数の目には触れるはず。その上で向こうから連絡しやすいように工夫を凝らせば……どうかなあ、この案」

「……早速、広告管理会社のサーバをハッキングしてみよう」

伊里江はキーボードに両手を乗せると、目にもとまらぬ速さでキーを打ち始めた。

「待ってよ」むんが伊里江のひじをつかんだ。「広告を見て反応した相手が真正銘のリアルとは限らないと違う？ 愉快犯が混じってるってことも考えられるし」

「それについては、二段構えで行こうと思うの」

萌黄が自信満々で答えた。

「二段？」

「まあ見てて」

三十分後、ああでもないこうでもない議論を重ねた三人は、ようやくできたばかりの広告動画を広告会社のサーバにアップロードした。もちろん無断である。しか

プライオリティも優先順位を最上位に設定したため、配信頻度はかなり高くなるはずである。

伊里江はパソコン画面を萌黄とむんに向けると、そのまま待つように言った。実際に一般の人が見るのと同じ状況で様子を見ようというのだ。

三人がじっと座って無言で待っていると、パソコンは自動的にスクリーンセーバーモードに切り替わり、広告のダウンロードが始まった。

最初に現れたのは、山寺総理による国民に向けたメッセージCMだった。「あと十日お待ちください」という政府の公報。これはしかたがないだろう。

次に現れたのは、再びM社のCM。ミハシ社長は海を見ながら、くつろいだ格好でコーヒーを飲んでいる。M社が日本でも多数の店舗を持つコーヒー会社を傘下に収めたのは先週のことだ。

「あ、出た！」

三本目にして、萌黄たちの作ったCMがようやく登場した。三人は互いに正座の膝をくつつけるように机の前に並び、自分たちが生まれて始めて作ったCMを、固唾を飲んで見守った。

萌黄たちの作ったCMはいたってシンプルで、黒の背景に文字がひとつずつ浮かび上がるというものだ。

文面は次のとおりである。

「この文章がすんなりと読めたアナタへ。

アナタは私たちの仲間です。

アナタがもし元の世界へ戻りたいと願うなら、
すぐ私たちに連絡をください。

アナタが元の世界へ帰る手助けをします」

これらの文字は、すべて鏡文字（萌黄や伊里江にとってはまともな文字）で表示されるのだ。

画面に映るのはわずか10秒。そのあいだに文末に添えられたボタンを押さなければ、次の画面に進めず、CMは終了する。

次の画面では、こちらにメッセージを送るための投稿フォームが用意されている。投稿フォームは、通常のキーボード入力を受け付けられないようにしておいた。メッセージはマウスで書くよう促している。

「つまり、このSS広告の肝心な点は」 むんが感心したように感想を述べる。「文面以上に、鏡文字を短時間で読めるかどうかってことよね。読み終えて次の投稿画面に行き着いたら、今度はキーボードやなくて、マウスだ

けで返信メッセージを書けという。リアルだったら苦もなく鏡文字で書くことができるはずだから。

萌黄、これがあなたのいう二段構えやったんやね」

「そうやねんけど……」

萌黄は不満そうに唇を尖らせている。

「ん、気に入らんことでもあるの？」とむん。

萌黄はチラッと伊里江の顔をうかがった。CMの内容については萌黄を中心にむんが手伝って練り上げたのだが、形にする作業はすべて伊里江がおこなったのだ。

「ちよつと地味過ぎる気がするんやけど……」

伊里江がビクツと肩を震わせた。

萌黄は小さな声でごめんなさいと言った。ところが、むんの講評はストレートだった。

「同感やね。広告にしては黒字に白抜き文字の羅列じゃ、ちよつと怖いなあ。読む前に引かれるかも」

「……すみません」

伊里江が両手を畳に付いた。

萌黄はびっくりした。伊里江の顔がさらに青くなっていたからだ。

「……私は芸術的素養など、ゼロなものですから」

そう言っ頭を下げた伊里江は大げさなほど恐縮している。

萌黄はハツとした。もしかすると彼にとって “芸術”

は禁句だったのか？

「エリーさん、そんなに謝らんでも——謝らんといってください。わたしらかて芸術の素養なんてないんやから」
萌黄が伊里江の手を取ろうとすると、むんが背後から首を伸ばし、

「それは言い過ぎや。わたしら芸術学部の学生やんか」
伊里江が顔を上げる。目がこれ以上ないほど開いている。

「……そ、そうなんですか？ ……すごい」

「スゴくないスゴくない。わたしなんて落第ギリギリの出席日数やし」と萌黄。

「わたしは目下、休学中」とむん。

伊里江はどう答えていいのか判らず、目をうろろさせるばかりだった。

さらに一時間、協議を重ねた結果、文字に薄暮色のグラデーションを付けることでデザインは決着した。

しかし修正版のCMを前にして、新たな疑問が噴出した。

「……このようなメッセージだけで信用してくれるものでしょうか？」

かつてさまざまな人間の裏表を目の当たりにし、長年、逃亡生活が続けてきた伊里江ならではの疑問だった。

「信用——かあ」

「……ええ、とくに私たちはサーバに不正侵入している身ですからね。第三者に電子認証してもらおうわけにもいかないし……困りましたね」

「困ることないよ」萌黄は言った。「わたしが同じリアル仲間として、顔を出したらええやんか」

「えっ」

唐突な萌黄の提案に、むんも伊里江もぽかんと口を開けた。

「そうでしょ？ CMの隅っこにでもわたしの写真を乗せたらどうない？ 悪い考えやないと思うけど——」

「アカンアカン。そんなことしたら、全部の敵に顔がバレてしまうで」

むんは険しい顔で萌黄の意見を却下した。

「……そのとおりです。しかも萌黄さんが生存していることが敵にさとられてしまう」

「生存——って、どういうこと」むんが訊ねた。

「……考えてもみてください。私たちは命からがら、島を脱出しました。米軍を始め、迷彩服たちさえも、私たちの生死を確認できないでいるでしょう？」

「——なるほど」

「……さらに私の兄です。彼も同じで、私や萌黄さんの消息を知り得ません。私のパソコンからは盗聴器を除去

しましたし、逃亡に使用した探査船にも発信器のたぐいは一切付いていませんでした。

……兄がよこした『約束だ』というメール。あれも罠です。うかつに返信しようものなら、こちらが生きてることが兄に知れてしまう。

……今はまだ私たちは消息不明、死んだかもしれないと思わせておくのが得策です。判りますよね？」

むんは判ると言って頷くと、

「だったら萌黄の写真を使うわけにはいかへんかあ。わたしかてお兄さんには電話で名乗ってるし、迷彩服には襲撃された時に顔を見られてるし」

「……揣摩さん——もダメですね。迷彩服の女性が生きてたら、きつと上に報告しているでしょう」

「柳瀬さんじゃ無名やし」萌黄がつぶやく。

しばらく沈黙が続いた。

先ほどアップロードした修正版のSS広告は、すでに日本中で配信されているはずだ。反応は来るだろうか。

それともあれでは信頼性が低すぎて相手にしてもらえないのだろうか。

むんがふいに後ろを振り返り、自分のリュックを手元に寄せた。中から携帯電話を取り出し、何かを検索していたが、探し物が見つかったのだろう、口を真一文字にすると、萌黄たちに液晶画面を向けた。

「この写真を使ってやって」

7

そこに写っていたのは、忘れもしない、むんのアパートで出会った青年——むんの恋人だった。

「そう、耕平さんよ。彼は北海道事件の遺族会幹部の中でも、若手急先鋒という存在やった。とくに先週、永田町で総理をつかまえ、詰め寄ったことは大きく報道されて世間の注目を浴びてしもて」

萌黄は知らなかった。

（時事問題には疎いからなあ。むんが関係してるっていうのに）

「——彼は自分のしたことがマスコミに取り上げられてスゴく得意がっていたけれど、遺族会の中では賛否両論やったわ。わたしは彼の直情的な部分も、場合によっては判りやすくていいかなと思ってたけど……そんな話をしてる場合と違うわね」

むんは自分でつつこむと、携帯を伊里江に差し出した。

「……いいんですか？」

「いい。でも彼——塚本耕平さんが亡くなったことが世に知られてないかどうか、それだけ調べて」

伊里江は了解と言うとパソコンに向かい、マスコミ各

社のニュースを、地方版も合わせてざっと検索した。

「……ありませんね。サーバのほうにも見当たらない。警察にも侵入してみました。そちらにも名前はありません。彼の死亡は確認されていないようです」

むんは目を閉じて一呼吸した。そして伊里江の横に膝をつき、携帯を机の上に置いた。伊里江は無言でパソコンからコネクタを引き出すと携帯に接続した。

数分後、耕平の遺影がSS広告のメッセージに並んで画面表示された。耕平は、やや緊張した面持ちで正面を向き、唇は何かを告げるかのように開きかけている。

（プロポーズする直前の写真やろか）

写真の下には「遺族会幹部 塚本耕平」と文字を添えた。

アップロードはすぐに完了し、画面から耕平氏の顔が消える。

「……午後三時」

伊里江は顔を上げて、むんと萌黄を交互に見た。

「……あのお、お腹が空きませんか？ できれば何か食べたいのですが」

フロントに電話すると、女将さんが直々にやってきた。中途半端な時間で申し訳ないが食事はできるだろうかと言ねると、

「どうぞどうぞ、たくさん召し上がってください。料理長が腕によりをかけますよって」

やがて部屋に運ばれてきた食事に萌黄もむんも目を見張った。刺身、伊勢海老、かに、てっちり。さらに茶碗蒸に吸物、そして果物まで山のように盛られている。

「ご心配ありません。追加料金などいただきませんよって、遠慮のう好きなおかわりしてちようだいな」

愛想のいい女将はニコニコ顔で、自ら給仕を務めるべく部屋に腰を据えた。

揣摩は食欲がないと言って隣室から出てこなかった。

伊里江はすでに猛烈な勢いで食べ始めていた。女将はそんな伊里江を眺めながら、

「食べっぷりのいい男って、すてきですねえ」

などと微笑んでいる。

「女将さん」

お吸い物を持ったまま、むんが話しかけた。

「なんででしょう」

「他のお客さんの姿を見かけないんですけど、今はシーズンオフなんですか？」

「いえいえ、そんなことないんですけど、ほら、政府からのお達しがあったでしょう。あのせいで予約客も全部キャンセル。もつとも律儀にキャンセルの電話をくれた人はほとんどいませんでしたけどね」

むんと萌黄は顔を見合わせた。思ったとおり、客は自分たちだけだったのだ。

「ぶっちゃけますとね。お客さんが来てくれないせいで用意してた食材が余ってしましましてね。それでこちらのみなさんに振る舞わせてもらったわけなんですよ。

内輪の話ですけど、このホテルも明日からお休みすることになりました。いえね、お客さんがないだけやのうて、従業員たちが浮き足立ってもうてね。しょうがないから全員、実家に帰りなはれって、さつき言うたところなんですよ」

なるほどと萌黄は思った。

世間は今どこも同じような状況のはずだ。身体が砂になつてしまうなんてことが目の前で起きれば（実際に目の前で見た人は少なくないに違いない）、世界の終わりが来たと恐怖に駆られることだろう。もはや仕事どころではない。

彼らは政府の「あと十日」に一縷の望みを託している。いちるその日までじっとしていれば何とかかなると思ひ込んでいる。世の中が比較的静かなことがそれを象徴している。

もし世情が騒然としていたら、自分たちの逃亡はここまでスムーズにはいかなかったろう……。

「——電車が止まってるんで、帰省するのも一苦勞なの。ウチの料理長なんか大きな車を持ってて、途中で何人か

降ろしながら帰る予定ですから、自分の故郷の近江八幡おうみはちまんにたどり着くのはいつになるやら」

萌黄は指にはさんでいた力二を膝の上に落とした。

「——お、近江八幡？ それって滋賀県ですよね」

萌黄はむんを振り返った。そして女将のほうに顔を戻すと、

「私たちもその車に乗せてもらえませんか？」

8

勢いで口にしたお願いを、女将はあつさりとOKしてくれた。

「袖触れ合うも……でございます。料理長の車はライトバンですから、おそらく余裕はあるかと」

「ありがとうございます」

「ちよつとちよつと萌黄」

案の定、むんが肩を寄せてきて、小指で萌黄を突ついた。

「まさか直接、大津に乗り込もうなんて考えてるんやないやろね？」

萌黄はぺろつと舌を出すと、

「ごめん。急に行きたなつてん。だってお兄さんのアジトを突き止めとないと、リアルの人々が集まっても連れ

て行くところがないでしょ？ エリーさんが言うたように、お兄さんはわたしが死んだかもしれないで油断してはまず。今すぐ行動を起こせば、先手を取れるかもよ」

「まったくう……エリーさんはどう思う？」

さざえをつついていた伊里江は顔も上げずに、

「私も賛成です」

「やれやれ」

萌黄たち一行が同乗することになり、出発はいくら早くても構わないと伝えたため、料理長の車は急遽この日のうちに出立することになった。

料理長の愛車は、かなりくたびれた白のライトバンで、定員は八名。従業員は持ち主を含めて四人。萌黄たち全員は乗れない。すると、

「俺はここでお別れするよ」

揣摩はそう言って残留を希望した。もちろん柳瀬もいっしょだ。

「また縁があつたらどこかで会おうな——そうだ、影松さんの電話番号とメールアドレスを覚えておくよ。できれば力になってやってくれ」

もちろん、と萌黄は言い、ライトバンに乗ったふたりは車が動き出すと、ホテルが見えなくなるまで手を振っていた。

「さみしくなったね」

空高く並んだうろこ雲が夕暮れ色に染まっていた。むんの横顔が雲の照り返しを受け、美しく輝いている。

ライトバンは紀ノ川沿いの国道二十四号線をまっすぐに走っていた。見通しの良い道路には対向車の影すらない。

「そうやね」

萌黄は短い言葉で答えた。ふたりとも乗車した時からずっとノートパソコンの画面をにらみ続けている。画面には刻々と変動するグラフと詳細なデータが流れていた。ノートパソコンはホテルの女将のものだ。ダメ元で女将に借してもらえるパソコンがないか訊ねてみたところ、旧式のものでよければと、倉庫で眠っていたものを出してきてくれた。

「こんなんではければ、差し上げますよ」

萌黄は女将の心遣いに感謝し、丁重に譲り受けた。

ノートパソコンは延長コードで伊里江のパソコンに接続された。伊里江が衛星を通じてデータの収集、解析などをおこなっているあいだ、萌黄たちは分析や集計した結果を分担して検討しようというわけである。左右のひっくり返ったキーボードは萌黄には扱いづらく、むん

が膝において操作することになった。

ライトバンを運転する料理長は久保田ですと名乗った。大柄な身体の持ち主で、肩といい腕といい筋肉隆々、板前になる以前は漁師をしていたという。目付きは厳しいが陽気な性格らしく、運転しながらずっと鼻歌を歌っている。ミドルシートにいる若い従業員たちが、後ろのむんにちよっかいを出そうとするのを「お嬢さんがたの邪魔をするな」と一喝してくれた。

ライトバンは順調に走行距離を伸ばし、和歌山と奈良の県境を越えようとしていた。最初の目的地の吉野で従業員をひとり降ろすのだという。

萌黄はリアシートの真ん中に腰掛け、むんの膝の上の画面と、伊里江の膝の上の画面を交互に眺めていた。

いま最も気になるのは、例のSS広告の反響である。無断アップロード＆無断配信からすでに三時間。伊里江がアクセス状況を調査したところ、投稿フォームのページまで進んだ数は三千件を超えている。文面を読まず、やみくもに次へ進むボタンを押した輩もいただろう。返信文が送られてきたのが約四百件。そこに書かれていたのは、落書きを除けば対象外の鏡文字（この世界ではまともな文字）ばかりだった。

逐一それらをチェックしていく。振動する車の中では両目は疲れるし、手書きなだけに読み解くのさえ一苦勞

だ。

「ひやかしみたいなのが多いね。なかには『取材させてください』なんて真面目なものもあるけど……。企画倒れやったかなあ」

萌黄がため息をつきながら愚痴をこぼすと、

「焦ることないよ。まだまだこれから」

むんは明るい声で答えた。

そんなむんの横顔をあらためて見つめ、萌黄はオヤツと思った。リアウインドウから差し込む夕陽が、むんの頬にくぼみを作っていたのだ。

（そういえばさっきの料理も、むんはあんまり食べてへんかった）

「アッ」突然、むんが叫んだ。「これ、当たりと違うかな？」

言われて萌黄は目を画面に戻した。

9

空にはまだ夕焼けの残照が残っているものの、この辺りまで来ると太陽は山裾に隠れてしまう。

萌黄たちの車は早々にライトを灯していた。窓を飛び過ぎる景色はすでに立ち込めつつある闇の中に鈍くかすんでいた。

萌黄が画面を覗き込んだ瞬間に感じたのは、自分を压倒するような画面のまばゆさだった。

——貴重な一日がもう暮れようとしてる。

一瞬、そんな焦りが去来したが、次の瞬間、意識は画面に映し出された文言に強く惹かれた。

《お仲間がいると知り、うれしく思います。

ご連絡をお待ちしています。

柊 拓巳》

文末には連絡先として、携帯の電話番号とメールアドレスが記されていた。

白地にていねいな文字で書かれた文章は、萌黄とむんを興奮させるに十分だった。

「エリーさん、見てみて！ 第一号や、大成功や！」

萌黄は伊里江の肩をバシバシ叩いた。さすがの伊里江も言葉を忘れて文面に見入った。

萌黄のはしゃぎっぷりに前席のホテル従業員たちがいぶかしげに振り返った。暗闇の中でぼうつと光る四角い画面を見つめる萌黄たちは、さながら洞窟で発見した宝物に驚喜する童話の主人公たちのように映ったろうか。

奈良県のほぼ中央、吉野町に到着した頃には、萌黄と

むんはすべての返信メールをチェックし終えていた。

結果的には、四百件のうち、まともな返信はあの一件だけだった。

チェックを始めてからも数十件の返事が相次いで届いたが、こちらは成果ゼロ。まともな文字（鏡文字に対する）で書かれた返信もあるにはあった。しかし、いかにも無理して書きましたというものばかりで、ほとんどがひやかしの内容だった。

「さつきは、いいことがあったんですか？」

運転席の久保田が横顔を向けて話しかけてきた。

車の外では今、従業員のひとりがここで降りることとで仲間たちと別れを惜しんでいる。

「はい、とても」

返事をしたのは、意外にも自称人見知りの萌黄だった。彼女は不思議と久保田という料理長に親しみを感じていた。

久保田は三十代半ばだろうか、うつすらと無精ヒゲを伸ばし、短く刈り上げた頭にはトレードマークのようにタオルを巻いている。

彼は太い首をめぐらせて、熊の人形のようなつぶらな瞳で萌黄に微笑みかけると、

「アイツらを届けるのに、これからまだ寄り道せんとなりません。アンタたちは大津まで行くんでしたね。到着

はかなり遅くなると思いますが、疲れたら遠慮なく眠ってください」

「すみません」

「謝ることはないですよ。腹が減ったら、その後ろに握り飯が山ほどありますんで、どうぞ好きなだけ召し上がってください」

再び、萌黄はすみませんと頭を下げた。むんもお世話になりますと言い添えた。

おおげさではなく、後部の荷台には握り飯を始め、食物がこれでもかというほど積まれていた。それはホテルが休業するので大放出したというのではなく、滋賀に到着するまで、食糧を調達できないことを女将が危惧したからだ。

その予想は当たった。すでにここまで来る途中、何軒ものコンビニやスーパーを見かけたが、開いている店はひとつとしてなかった。

若者たちが戻ってきてドアを開き、乗り込んだ。ひとり泣いていた。彼らの結びつきの強さを見せられた思いがした。

（きつと、いい働き場所やったんやろうな）

久保田はライトバンは再スタートさせると、残ったふたりの従業員に向かって、

「おまえらの実家は、はいばら榛原とてんり天理やったな。時間も遅く

なつてきたから少し飛ばすぞ」

お願いしますと従業員たちが体育会系のノリで頭を下げる。

久保田は鼻歌を奏でながら、ライトバンを本道へと戻すと、山の中の国道を一路北へとアクセルを踏んだ。

萌黄はその久保田の後頭部を見つめながら、硬直したようにアゴを震わせていたが、

「ねえ、むん。大津に行く前に、わたしの家に寄られへんやろか？」

「家——って、とみお富雄の？」

萌黄はうんうんと頷き、

「自分ちのパソコンを持ち出したいんよ。だってこれから敵のふところに飛び込むわけやん。素手で戦うわけにはいかへんから、何か武器がほしい。わたしが使える武器っていうたらパソコンしかあらへんやんか。自宅のパソコンにはこれまでに自作したり集めたりしたツールがいっぱい入ってる。エリーさんが使ってるリュックパソコンみたいなきつと役に立つはずや」

「なるほどね。わたしも賛成する。それに天理からやつたら、富雄はほとんど通り道にあるしね」

萌黄はそうそうと頷いたが、

「ただ気がかりなのは、迷彩服たちが見張ってたりせえへんかということなんやけど……」

「そんなこと言うてたらなんもでけへん。だってパソコンは絶対に必要なんでしょ？」

「うん」

「ほならゴーやわ。なんとかなるって」

10

残る二人の従業員を榛原と天理で降ろしたライトバンは、次の目的地である奈良市西部に向けて、スピードを加速させた。

ハンドルを握る久保田は、萌黄の寄り道をお願いを快く聞いてくれた。

真夜中の奈良は別の国のようだった。国道二十四号線は県内でも数少ない幹線道路のひとつだ。にもかかわらずすれ違う車の少なさには驚かされる。明かりの灯る人家もいつもより極端に少ない。

国道を外れてとある家の軒先を通った時、黒い服を着た人々が集まっているのが見えた。お通夜を営んでいるらしい。ひっそりと。

その後も何軒かの家の前で同じ光景を見た。きっと砂になってしまった家人か親戚を弔っているのだろう。萌黄は集っている人々の顔に浮かぶ悲しみとも恐怖とも憤りともつかない、それでいてどこかあきらめを含んだ表

情に、胸を締めつけられる思いがした。

乗客が減ったため、萌黄とむんはミドルシードに移った。伊里江はリアシートで相変わらず背中を丸めたまま、パソコン画面から目を離さない。

伊里江は今、彼のヴァーチャルが残したさまざまな分析結果を検討していた。ヴァーチャル伊里江が亡くなる前に転送してくれたデータは膨大なもので、そこからさまざまな仮説が提案され得ると伊里江は言う。

彼はそのひとつを口にした。

「……淡路島に渡る直前に地震がありましたよね。あれはひょっとすると、リアルが原因かもしれないと彼は書き残しています」

「まさか——」

「……地震の発生状況がかなり不自然だったそうです。計測した機関のサーバには、研究者たちの『あんな場所であんな地震が起きるとは』と首を傾げるコメントが多数あったということです」

「——怖い」

「……ええ。しかし怖いついでに言ってしまうと、地震の元凶——もとい、引き金になったのは萌黄さんではないかと私は推測しています」

「ちよ、ちよっと待ってよ。なんでわたしが!? 貧乏ゆ

すりの癖すらないのに」

萌黄は背もたれにアゴを乗せて猛然と抗議した。

「……いえ、その、あくまで仮説なんですから」

「仮説やったら何言うても許されるん？」

「……でも……でも地震の前まで青い顔をしていた萌黄さんが、あれ以後、妙に血色がよくなりましたよ」

萌黄は絶句した。さらに横からむんが、

「わたしもそれは感じてた。ああ、元気になったんやなあーって。でも」伊里江を見て「もうちよつと言い方があるんじゃないですか？ これじゃ萌黄がかわいそうやないの」

責められて伊里江はますます背中を丸めた。どちらが年上だか判らない。

萌黄は萌黄でショックだったのは自分が震源地だったことよりも、顔色の変化を男性に観察されていたということだった。

（恥ズカシイ――）

萌黄は背もたれに顔を埋めた。

久保田の鼻歌も途切れ、しばらく車の走行音だけがBGMのように流れていた。

「……それでも」おずおずと上目遣いに顔を上げた伊里江は続ける。「仮説をいったん認めることで、新たな展望が開ける可能性があるのです」

「どういうことよ、テンボーって。判りやすく言いなさいよ」

むんは鼻息も荒く問いつめる。

「……つまりですね」

伊里江はリュックパソコンをキー操作した。彼に促されて、むんは自分の膝の上の画面を見る。萌黄も覗き込んだ。

接続ケーブルを通じて送られてきた画像は日本地図だ。ところどころ、ゴマのようにドットの粒が振りかかっている。

「……鏡像世界誕生以後に発生した地震です。併記されている数字は震度を表しています。どれも小規模ですが、発生回数は計七回。そのひとつは神戸ですが、これに先ほどSS広告から返ってきた——えーっと、木篇きへんに冬と書いて何と読むのですか？」

「ひいらぎ」むんが答えた。

「……その柊氏のアクセス場所を重ねてみると——」

伊里江が作った広告は、アクセスした相手の居場所も回答の内容も、第三者には知られないようスクランブルがかけられている。だがそこはちゃんとしたもの、伊里江には判るようになっていたのだ。

「……いかがでしょう。今朝早くに起きた地震と合致します」

終拓^{たくみ}巳。まだ見ぬリアル候補者がいるのは岡山県だった。アクセス記録にも tsuyama の地名がはさまっている。そして岡山の中央やや左寄り、津山市の辺りに地震があつたことを示すゴマが集中していた。

「……どうです。リアル探しのヒントになるでしょう」
打って変わって、伊里江は得意げな笑みを浮かべた。
さすがに萌黄もうなずくしかない。

「お嬢さんがた。この近くじゃないかい？」

久保田が声をかけてきた。

ライトバンは萌黄の家に近づきつつあつた。

だが予期したとおり、そこには敵の目が光っていた。

〈第十章につづく〉